

# 外国語教育の学習事情理解とその内容の比較

— 日本人学校と現地の学校の取材を通して、今後の教科指導に生かす —

前リマ日本人学校 教諭

千葉県柏市立柏第四中学校 教諭 福田 裕 司

キーワード：英語学習，ネイティブスピーカー，日本人学校，現地校

## 1. はじめに

私が勤務していたリマ日本人学校では、小学部1年生から中学部3年生まで、週2時間のネイティブによる英会話の授業を行っている。もちろん中学部では、その他に必修の英語の授業（週4時間）を行っている。英語学習においては言えば、当然、日本の公立小・中学校よりも恵まれた環境であると言える。その恵まれた環境の中で、児童生徒にどのような効果が現れているのか、また、それはどのような教授法によって現れるのかという点に注目してみた。

中学部における、必修である週4時間の英語の授業で感じることもある。小学部で英語学習を経験してきた児童が中学部に上がってきたときには、英語を話すこと、読むことについては抵抗がなく、上達も早いということである。また、試験等を行った結果から、他の教科に比べ理解度が高いこともあげられる。英検の合格率も高く、中学3年生で2級に合格する生徒も希ではない。学校以外においても英会話の学習をして力をつけている生徒もいるが、将来海外で活躍する仕事に就きたいという目標を持った生徒が多く、英語学習に対して意識の高さもこのような結果を導いている要因であるといえる。

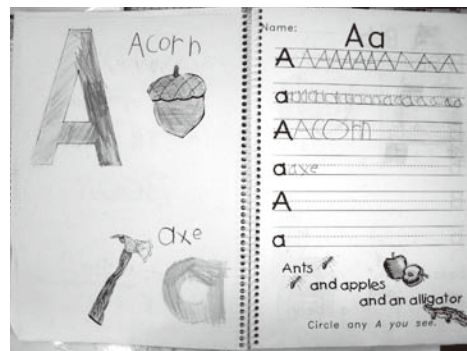
取材活動としてリマの現地校（ラ・ユニオン校＝リマにある日系校）を訪れた。そこで現地における英語学習について調査を行なった。ラ・ユニオン校は私立の学校で幼稚部から高等部までが一貫となった学校で、比較的裕福な家庭の子どもたちが通う学校である。幼稚部から始まる英語学習の内容、その上達の状況、そして英語という教科の位置づけを認識することができた。

## 2. 英語学習の授業

### (1) リマ日本人学校の英会話の授業

ネイティブスピーカーの講師が行なっている英会話（小学部1，2年生対象）の取り組みについて調査をした。英会話の授業は週2時間行なわれている。文字を使った学習と紙を切って貼ったり、色を塗ったりする作業を取り入れながら英語に触れるものである。

小学部1年生の授業では、毎回1つずつアルファベットを学習する。例えば「A, a」であれば、「acorn: ドングリ」, 「axe: 斧」, 「B, b」であれば「ball: ボール」, 「balloon: 気球」というように、綴りの最初にその日に習うアルファベットがついている単語を2つ提示する。そしてその単語の意味を表す絵を児童一人一人に渡し、児童はそれを切り取り色を塗る作業を行う。その作業の後に綴りを書くことをさせる。そのようにして発音とその意味を、聴覚、視覚で学習し、色を塗るという作業を入れることで更に印象を強めて覚えさせている。発音とその意味するものを説明する間にはもちろん日本語は入らず、自然な形で英単語を覚えていく形となる。



アルファベット練習ノート（Aの練習）

母音の場合は、提示する単語の2つとも異なる発音をするものを選んでいく。

「acorn: [ei]」, 「axe: [ʔ]」, 「eagle (ワシ): [ʔ:]」 「elephant (象): [e]」

児童は、「どうして同じアルファベットなのに違う発音をするのか」という疑問は持つことなく発音し覚えていく。

これは、理屈を抜きで学習できる幼少期の特徴であると思う。次第に講師がアルファベットを言えば、そのアルファベットで始まる単語を言えるようになる。

小学部1, 2年生の英会話の授業では、語彙を増やす学習も行っている。毎回、身近なものをテーマにしてそれに関する単語を学習する。最初の授業では「instructions (指示, 命令)」をテーマに、「be quiet」, 「sit down」などの表現を示し英語での指示を理解させるようにした。そして「school」や「pets」などのテーマで語彙を増やしていき、単語ゲームをして楽しむことができるようになっている。



語彙の練習ファイル

## (2) 現地校 (ラ・ウニオン校=リマにある日系校) の英会話の授業

ラ・ウニオン校の英語学習は幼稚部から始まり、週4回、朝の1, 2限(1限=8:05~8:45, 2限=8:45~9:25)に全学年が英語の授業を行っている。小学部3年生までは担任の教師が、小学部4年生以上はパシフィコ大学(語学を中心とした学科を持つ大学)の先生が授業を行う。この英語の授業の他に、必修の英語の授業が7時間あり、このうち週2回2時間続きの英語の授業を行っている。このようにかなりの時間を英語学習に割いており、子どもたちの英語力も磨かれている。

### ①小学部1, 2年生の授業の様子

低学年の授業ということもあり、文字を使った学習よりも物を作ったりする作業を取り入れながら英語に触れる学習を行っていた。

一つめのクラスは家や家族をテーマにした内容で、作業中は先生が英語でアドバイスをし、最後にできた物について数人が英語で発表するというものであった。児童は楽しそうに作業を進めており、人や家の中にある物、その色について先生と英語で対話し、身の回りの物を何というか学習していた。二つめのクラスは紙芝居形式で話を進めながら、絵の内容について先生と児童が英語で対話をするというものであった。様々な動物が登場する話であり児童は興味深げに先生の話に耳を傾け、動物の名前やその動きについて英語で表現する学習をしていた。どちらのクラスも身の回りのものや児童が興味・関心を抱く題材を効果的に用いており、児童は、先生と抵抗なく英語でのやりとりをしているという印象を受けた。

低学齢期からその学年にあった簡単な内容で英語に触れることは、とても自然な形で英語を使って学習できるということがわかる。児童は、先生が質問したことの答えや自分が伝えたいことを何とか表現しようという気持ちが強いので、英語を口にするには抵抗がないようである。

ラ・ウニオン校の児童生徒は普段はスペイン語で生活をしている。彼らは英語とほぼ同じアルファベットを使い、またスペイン語の中には英語と似ている言葉もあるので、日本人が英語を学習するよりもスムーズに英語を受け入れることができているように思う。日本でも小学校における英語の授業が行なわれているが、使える英語を身につけることからすると非常に必要なことであろう。更に低学齢期からネイティブスピーカーの英語に触れ

て学習することは、音声が入って口から発音させるという言語学習の基本から考えると、大きな効果があると思われる。

## ②小学部4～6年生の授業

小学部4～6年生を能力別にクラス分けをして授業を行っていた。あるクラスは、27人の児童が授業に参加していたが、ほとんどが6年生で、英語力のある4年生、5年生の児童2人が混じっていた。

参観したときの授業内容は、栄養について話をしていた。タンパク質、カルシウムといった栄養素がどんな働きをし、どのような食べ物に含まれているなど、一見家庭科の授業で学習するようなことを英語で学習していた。もちろん家庭科の授業で学習するような踏み込んだ内容まで触れることはない。どの児童も、先生の英語の指示、質問に対し積極的に反応していた。



小学部4～6年生の授業風景



小学部4～6年生の授業風景

栄養についてという難しい内容に感じるが、身近な食物や聞き覚えのある栄養素の名前、そしてどのような働きがあるのかを簡単な表現で話すことで、興味を持って参加することができるのだと感じた。

別のクラスでは、25人の児童が動物について話し合う授業を行っていた。これもまた身近な内容であり、児童は積極的に参加していた。ただ、ワークブックを使った個人作業になると取り組みに差が出て、先生が全員を見きれない状況になる場面もあったので、やはり個人での作業には工夫が必要であると感じた。

12人の比較的少人数で授業を行っていたあるクラスは、比較級、最上級について学習をしていた。高いレベルのクラスで、ケンブリッジ（ラ・ユニオン校の児童生徒が受ける英語の検定試験）のテストを受験することを目標に授業が行われているようである。

小学部の各学年で学習する文法事項についてまとめると次のとおりである

4年生で学習する内容：・体の部分の名称 ・色 ・数字 ・場所を表す前置詞 ・命令文  
・現在進行形 ・一般動詞 ・助動詞 can ・天気、時間

5年生で学習する内容：・三人称 ・There is ～ /There are ～ . ・受動態（madeを用いた文のみ）  
・be going to ～ . ・比較級 ・be動詞の過去形

6年生で学習する内容：・動名詞 ・不定詞 ・一般動詞の過去形 ・受動態 ・現在完了形 ・have to  
・関係代名詞

## ③中学部の授業

英語の授業は能力別にクラス分けされており、あるクラスは12人の生徒が授業に参加していた。参観したときには4～5人のグループに分かれ、ある日の出来事について話し合っていた。実際にあったことを述べているので、それほど難しい表現を使っているわけではないが、先生の指示、生徒同士の会話ともに英語でスムーズに行

なっている様子であった。幼稚部、小学部の頃から長い時間英語に触れているだけあって、自然な形で、英語だけを使い授業を行っていた。

#### ④ラ・ユニオン校のこれからの英語学習

リマには近辺にいくつかのインターナショナル校があり、ラ・ユニオン校の保護者の多くは数学等の授業も英語で行い、そういった学校に引けをとらない程度の英語力を身につけさせてほしいと願っているという話であった。しかし、ラ・ユニオン校はインターナショナル校とは異なる学校経営方針を持っており、そういった保護者からの要望を全面的に取り入れることはできない。しかし、将来、大学へ進学したり留学したりする生徒のことを考えると、英語学習については見直しをしていくことも考えていきたいとのことであった。

### 3. おわりに

今回、現地教育事情のテーマとして英語学習について取り上げたが、英語学習を始める時期やその内容ももちろん重要なことであるが、教える側も学ぶ側も英語に対する意識というものが上達の鍵を握る大きな要因になると改めて認識できた。

近隣のアジア諸国の状況についても見てみると、どの国も国際化をテーマに据え英語とコンピュータ教育に力を注ぎ努力を続けている。それは、国家主導で「バイリンガルな人材育成」を目標に、学校や保護者、そして子どもたちもその進むべき方向へ一丸となっているようである。どの国も等しく英語学習には力を入れているといえ、その取り組みが結果として実を結び始めている国もある。

このように他の国の状況を知ることにより、日本の子どもたちが置かれている状況、そして教えている立場の状況を客観視できた。今後、これまでよりもさらに国際的視野を持って生活していくことが必要となる社会において、今回の調査は世界に羽ばたく人材を育てる立場の一人として刺激を受けることになった。